続 宇治川夜話

（済美寮考承前）　黄　旗　亭

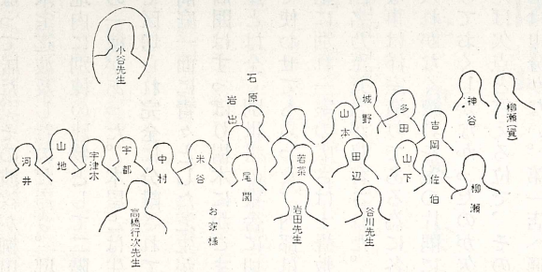
㈣ 北野済美寮

第一話のオリビヤ布引済美寮より時元は少し遡る。大正七年四月の事、私等小学出の小店員四十名余りが新規採用されて入店、新築間もない北野済美寮に収容された。木の香も新しく畳表の匂いも清々しい一室に万感交々の第一夜を過したのであった。宜なる哉、懐しの父母の膝下を離れ他人ばかりの実社会へ船出した初夜である。西も東も判らぬ少年達の為に本店教育係はせめてもの親心として真新しい住居や寝具に細々とした気配りを払われた事であろう。廊下をはさんで両側に幾つかの六帖の間が並び、その個々の室に三人宛起居する事になった。寮長の宇津木亥一に引卒されて此処から毎朝本店へ通うのである。北野天満宮の崖下から加納町三丁目に出て、有名な三角帳場の前を山手通を行く。本店迄徒歩で三十分位、凡そ二粁程あっただろうか、宇津木を先頭にして少年達は遠足の一群の様に列を進めた。宇津木は前年入店したばかりの青年店員、教育係に配属されて私達を受け持つ事になった。私達に取っては最も身近な指導者であり兄貴分に当るのだが、一度に多勢の弟分を背負い込んだ様な此の仕事は若い宇津木には随分厄介な事であったろうと思われる。けれどもそうした中に培われた親近感が今でもそっくりそのまま交友の中に泌み込んで居るのだから思えば有難くも嬉しい話である。この前後の頃に就いて宇津木メモの抜萃を転録する。

「――浦戸湾の丘の上には最早桜がふくらんで居た。大正七年三月の中頃、私は高橋大先生と土橋英太郎（はげ茶瓶）と三人で見習員の採用試験に行った。土佐の高知に着いた頃から降り出した雨は中々止まず遂々滞在中降り通しであった。雨の中を靴を履いて歩く私を土地の人達は珍らしそうに眺めて居る。市電の乗客の中で、洋服を着て居ても靴を履いて居る者は一人も居ない。雨が降れば洋服でも下駄ばきがその頃の土佐の風習であった。私は神戸に住む都会人の誇りを此の時程痛感した事はない。変な所で、これも鈴木商店に居るお蔭だなァと思った。この時に、武井一郎、広井亀吉、小松喜一、杉村芳孝、堀内宏展、北川唯一、横山猛、井上満、浜中四郎、三宮敬志等が採用と定って来神の日時や道順や入店の心得等申し渡して一先づ帰神した――。」宇津木の面目が躍如として居る。その頃の宇津木青年は容貌魁偉、豪放磊落にして頗る人懐っこく頼り甲斐のある男であった。非戦斗部隊教育係あたりで安閑として居る様な質ではなく鬱勃たる斗志を秘めて何時かは海外で一あばれしてやろうと虎視眈々として居た。

幾干もなく念願のスマトラ転勤を拝命した時の生々した彼の顔が忘れられない。

曲りなりにも本店での一日を終え、宿舎に帰ると神戸市街の夜景が眼下に見え、その向うに黒々と海がぼやけて居る。少年ならずとも望郷の念一入なるものがあろう。後から気付いた事だが可成り大勢の者が軽いホームシックに襲われた。筆者もその一人であったかもしれない。胸を締め付けられる様な思いもしたが、それもほんの四、五日の間の事みんな直ぐ打ち解けてお互の身の上話や本店での新しい仕事の話等語らえる様になり元気を取り戻して親密の度を増して行った。とは云うものの之もつかの間、一ケ月程経った或る日、私等の仮勤務が終って本所属が発令された時、十数人が思いもかけぬ遠方の支店出張所へ赴任される事になった。晴天の霹靂の様に辞令一本で地方へ飛ばされるのである。東京支店へ犬飼清一が、下関へ深谷邦蔵、京城へ宮崎茂、名古屋へ丸本道憲、小樽へ三宮敬志等苛酷とも峻烈とも云う可き人事であった。彼等は二枚続きの毛布と旅費をもらって半べそ顔で途方に暮れて居た。結局親鳥に巣から放り出された雛の様に彼等はただただしくも雄々しく任地へ飛び立って行った。寮には急に空室がふえてぽっかり大穴があいた様な空虚が流れた。その直後、残った私等に突然、岩屋済美寮へ転出する様指令が出た。僅々三ケ月程で此処から退去する事になり私等の寮遍歴の第一歩が初まった。私等の出た後へは中学生の店員十数名がきた。吉田菊次郎、近森一馬、武藤、小林、村井等の人達である。北野済美寮は新しく入店した者達の新しい住居としてそれから後も目まぐるしく転入生があった。



大手御本邸にて大正６年11月、第１回新入社中卒22名１ケ月の訓練修了、勤務地も決定したので御挨拶に行った時の記念撮影です。この後１～２週間のうちに小樽、東京、横浜、下関、京城、大連、青島、台北、台南と分散赴任し、本店勤務は６名でした。50年以上経過した今日、私共両名以外は全く消息も判りません。若しご存じの方がありましたら何卒お教え下さい。　山地　保　宇津木亥一

㈤ 岩屋済美寮

追い立てられる様に北野済美寮から去った私等の次の宿舎は岩屋の寮であった。北野の寮の玄関に各自の引っ越し荷物を出して置いたのが夕方にはちゃんと岩屋に運ばれて居た。岩屋済美寮と呼んだが凡そ寮と云うにはふさわしくない建物で、平家建五戸一棟の粗末な棟割長屋が露路をはさんで向い合って建って居る。間口二間奥行五間程の小さな貸家普請で内部は四畳半六畳の二間しかない。申訳程度の先栽があるが一本の木も植わって居ない。その頃一番多く見られた庶民住宅である。その一戸に四名が入居した。少年達の寝住居としてはあまりにも世帯じみて貧乏くさく寒々としていた。神戸製鋼所の煙突が眼下に林立して敏馬の海浜が手のとどく様に見えた。阪神電車の岩屋と脇の浜の停留所の中間位の所で電車道から少し山側へ上った所にあった。

店への通勤は春日野道から宇治川迄市電を利用しその分だけ交通費が支給されたが、宿舎から脇の浜、春日野道と阪神電車が走る路面を一粁余り歩かねばならない。おまけに市電ののろさと云ったら話にならない程で停留所の数が十以上もあるのだから仕方がないが宇治川迄小一時間もかかるのである。その分だけ早起きしなければならない。北野に居た時と較べると遠い離れ小島へ流された様な思いがした。当時日曜、祭日と雖も午前中出勤と云う建前になって居たので休日でも店へ行かねば食事にありつけない。早く帰っても索莫として居る。私は曽てこの寮で休日にのんびりした記憶がない。両隣り近所に同僚が居るのが判って居ても話し込むと云う様な風景もなく同期の私達は此処では大いなる幻滅の悲哀を味わった。

この岩屋の寮で異色を放ったのは倉庫部勤務の中尾文策である。小柄な体軀で丸々と肥りゴムマリの様な弾力を思わせる。姫路の方の出身で物おじのしない快男子であった。無類の勉強家で向学心が強く給費生の選にもれたのが惜しまれた。夜おそく迄ねぢ鉢巻で勉強をつづけ腹が空くと自前で買った牛肉やうどんをホーローの洗面器で煮て喰ったりした。人の云う事等一切無頓着で随分奇行が多かった。弊衣破帽も美徳の一つと考えられた時代の事、中尾は人が捨てた様な鳥打帽を被り爪先の破れた靴先から親指を覗かせ午ら平気で働いて居た。一部の人から顰蹙（ひんしゅく）を買ったが総じて店の多勢から元気と稚気を愛され彼も又それを得意として居た。夜学の成績も抜群で何か一仕事仕出かすのではないかと思って居たが何時の程にか姿が見えぬ様になった。後に風の頼りに聞くと、店を辞めて或る人の処で寄食し遂に独学で高文試験に合格したと云う。正に実行力と強固な意志を兼ね備えた見上げた男であった。幾十年か経て後、私は不図したきっかけから彼の消息を知る事が出来た。官界に入った中尾文策は大阪の堺刑務所の所長を勤め続いて第四行政管区長となり現在は官職から退いて東京で公証人となり公証役場を開いて居ると聞

く。五十年に近い断絶ではあるが機会があれば是非会い度いものと思う。鈴木商店は俊秀の集りで一くせも二くせもある人物が多かったが中尾は中でも傑出した一人であった。此処での起居は一年半程続いた。米騒動の大事件に遭遇したのもこの宿舎時代の事で店との連絡の便が悪かったので右往左往してキリキリ舞をした。教育係も岩屋の連中は少し可愛想だと思ってくれたのか「オリビヤ」へ転居の指令が出た時は天にも登る心地がした。そして第一話で書いた様に大正八年の末布引へ移る事になった。

(六) 柳田済美寮

何んな都合かはしらぬが宿舎運の悪い私等は又々オリビヤから放逐された。四度目の落ち行く先は之は又結構な中山手三丁目の柳田はんの居宅の一部である。一年半程の間に四度も引っ越しをさされたのである。後に午鈴会と称した私等のこの一群だけが一番多く済美寮を遍歴したものだ。柳田はんの本宅へ転り込んだ様な私等は漸く此処に安住の地を見出した様にホッとした。あの頃は店の一番盛んな時で次から次へと店員や見習員が増えて、それも殆んどが独身者であったので「ねぐら」を増設するのに教育係や庶務係が躍起となって居た。その波紋が柳田はんの本宅迄波及したのだろう。邸宅の敷地内に別棟の建物として二階洋館風の一棟があった。本屋とは生垣を以て区切られ完全に分離されて居た。前庭一面に青々とした芝生が密生し周囲はすっぽり樹木にかこまれて本屋とは全く別世帯の寮舎に切り離して使わせてもらった。内部は上下四室に別れ一室の広さは十畳敷程あり四名乃至五名が収容された。只残念な事は洋室造りである為に各室共押入れがなく夜具を室の片隅に積み上げておくしかなかったのが欠点と云えば欠点と言える位で、その他の事では申分がない。第一店へ通うのが一番近くなったのが何より有難かった「柳田済美寮」と云う堂々たる看板表札もかかったし専用のピンポン台も備え付けられた。亡くなられた彦次さんが中学生になり立てのほやほやで、多勢の小僧が柳田邸の平和に割り込んで来たのに驚いたらしいが間もなく遊び仲間に加わり寮室へ度々遊びに来た。後に安東家へ嫁せられた妹さん（幸子）も物珍らしげによく侵入して来られた。小学生に成るや成らずのあどけないお嬢ちゃんだった。大柳田はんは日野さんと特に親しかったので私が会計部に居た関係上顔と名前を知られ時たま本宅の私用に名指しをされた。そんな事が無性に嬉しく光栄にも思えた。或る晩、アンチピリンか何か風邪の薬を買って来る様に頼まれたがお嬢ちゃんが一緒に行くと言ってきかないので止むなく手を引いて生田通りのあたり迄行ったが帰りの途中で玩具屋の店先で目に付いたものがほしいと駄々をこねられ往生した事があった。本宅へ帰り着いた頃は半べそで涙を一ぱいためて居たのを私は重大な失策をした様に感じくどくどと言訳をしたら奥さんから却て労をねぎらわれ五十銭札を一枚下さった。忘れ様にも忘れられない思い出である。私等の仲間は運動に勝れた神経を持って居る者が多かった。澎湃として起った本店内の野球熱に刺戟されて私等も「柳田ベースクラブ」つまりＹＢＣを結成した。投手に田庭、染本、捕手木畑、内野手魚田、吉野、斉藤、竹村、外野手高田、中元、内藤、難波と云った陣容である。再度山の池蹟広場や鳴尾製油所の空地へ練習に出かけて製油所のチームや兵庫の魚油工場等とも試合をした。本店では「イーストクラブ」と云うチームが編成されて、投駒井捕西郡、内野肥後、山田、小林、明神、外野伊藤、森田、久野等錚々たる連中が揃って居た。此の柳田寮へ移ってから朝早く亜米三倶楽部で庭球をやる事が出来る様になり爽やかな朝の一時を満喫してから出勤する等時間的にも大いに恵れる事になった。小僧風情の生意気盛りで、ラケットのケースを提げて中山手通りを濶歩したあたり得意の絶頂であった。この頃巷間では「ゴンドラの歌、沈鐘の歌、城ケ島の雨」等の流行歌曲が氾濫し好景気は漸く細部迄浸透して世は挙げてよき時代を謳歌した。今で云う「古きよき時代」の典型的な一時代であった。

俳句　日章旗　柳田　義一

嬶の忌　花の哀調　茎立ちて

合掌を　解けばけば激しき雨あがる

再び遇うことも無き遍路が鈴ひそめ

日章旗が焦点踊り場の噴水かげはう

迫る産月白菜横に抱き帰る

ばらが散る遅れし婚期や付け睫毛

続　スラバヤ懐古

宇津木　亥一

昨秋十月十五日京都細川別邸の例会には、紅葉にはまだ少し早い迎賓閣の中庭に入るや否や藤原恒三郎夫妻に出会った。此頃は肉付きも豊かに御健康そうに見受けられますと云うと、否、そうでは無いとの答です。どうぞ無理をせず随分お気を付けて下さいと云ったのですが、同じ庭の床几に腰掛けて安藤珍成氏には、御健康で誠に結構です。長生きすればまたお目に掛れますから、ご大切にと御挨拶しました。

宴に入るに先立ち藤沢次郎氏の逝去が報ぜられました。戦後の有名な鉄鋼庁長官であったが余りに早世、甚しく衝撃を受けました。

そして帰宅後、間も無く「スラバヤ懐古」を原稿に記しました。当時の寺崎、大久保両支店長は、安藤珍成バタビヤ支店長とともに揃って御健在なことは慶賀にたえぬと書きました。すると今春年賀の季節に入って、安藤氏の御令息、芦屋の奥田充幸氏より父は賀状の筆を執ることが出来ぬ状態にあるので悪しからずとのお知らせを頂きました。

一月二十一日大阪東洋ホテルの新年宴会へ行くと、藤原恒三郎氏夫妻は列んで卓につき、荒尾某氏の珍談を破顔で聴き入って居られるので之は大丈夫だと感じたが、しかし安藤珍成氏のお顔は見えません。

今夏五月七日には奈良依水園の御家様、御主人様の法要に伺ったが、朝からの相憎の雨で、法要のさ中には、天の底が抜けたのではないかと疑われる程の大雨です。二、三百名の列席者は天幕の下で身動きもできず、時々目に入る旧友に対して、手を挙げたり、眼や顔で合図するだけで、お話などは通ぜないほどの雨風の音です。漸く雨も止み、風も鎮まったので新緑に映える天下の名園に立ち出でて園遊会が始まったのですが、なかなか誰が誰だか認識も不可能な混雑です。木畑幹事がマイクで大声に、これから記念撮影をします。雨の晴れ間を利用しての撮影ですから直ちに池の辺りに集って下さい。早く早くと急き立てるものですから、折角握っていた盃を惜しくも投げ捨てて、雨で湿った足許の危い芝生を踏みしめ、踏みしめ築山へ向って集合すると、其処に図らずも安藤氏を発見しました。堅い堅い握手です。

バタビヤ時代には世にも美しい奥様を擁して天下を睥睨して居られた大正十一年頃を懐い出してのお話まで交換しました。然し藤原氏夫妻の御顔は見ることが出来ず、雨風のためとは申せ本意ないことでした。

スラバヤ生活と庭球は切り離せぬ関係があった。四季とも夏の暑さである。旺盛な新陳代謝に伴う体力の消耗を防ぎ、栄養を完全補給して運動することが強く要請された。退社後の一、二時間、太陽が没して薄暗くなるまで交替でボールを打っての猛練習です。在異邦人商社の社宅には大概コートが有ったので年々乾燥季には全テニスマン一〇〇名内外のトーナメントを行うと共に、招待大会を開いた。その季節には番組の編成から、当日のサンドウィッチ、ビールの立食宴の献立までサービスに労力を惜しまなかった。わが藤原氏は当社の第一選手であり常に花々しい試合をして、栄冠を飾っていた。一方安藤氏はバタビヤ邦人界のチャンピオンシップを握って居られた。汗は肌着を絞るほど湿らし、ズック靴底には水が溜った。その後で温湯のシャワーやマンデイである。浴衣に着替えて夕食のゴングを待った。食堂へ降りて一二杯のサクラビールを飲めば一日の労苦は一瞬にして吹き飛んだ。

その割に庭球が上達したかと云えば、相変らずの下手である。しかるに後年神戸製鋼所の軟式庭球会に列してダブルで優勝銀メダルを頂いた記憶がある。軟式の方が容易な為かとも思う。

大正九年頃信太山野砲入隊し訓練されたので多少の馬術は知っていた。社宅には老いた乗馬一頭が飼われてあり、偶には単騎郊外へ出た。市中は車の往来が激しいため馬が恐がるが、一歩住宅街を離れると緑の堤防や田園が遠くまで展がりこの脚の遅い老馬でも相当快適な気分を味わえた。遙かに続く椰子の疎林、野菜や稲田の上には涼しい風が吹き抜ける。頗る満足して小川の辺に出た瞬間、突然、鞍から投げ出されたこともあった。現在相生市に御健在の岡邦彦氏は真からの馬好きで、乗馬